

「聖書」とはどのような文書か

－ キリスト教の聖書についての初歩的知識 －

初期のキリスト教徒たちは、他の人々に布教活動をするにあたって、まだ自分たちの聖書をもっていないかったため、ユダヤ教の「聖書」を使って布教活動を行っていた。

そのこと自体、きわめて奇異なことではあるが、以下のことを知れば何ら不思議ではない。

ユダヤ教は、選民思想をもっていたが、ヘブライ人（イスラエル人）以外の人々がユダヤ教に改宗することは拒まなかった。いや、むしろ積極的にヘレニズム・ギリシア世界に布教していた。もちろん異民族がユダヤ教に入信するためのハードルは高かった。ユダヤ教の選民思想とは、「異教徒とは席を同じくしない」ことを強制したからである。よって、異民族が改宗する際には家族とも縁を切ることを覚悟しなければならなかった。

しかし一方で、ヘレニズム・ギリシア人たちが、ユダヤ教の高い倫理性にひかれていたことも事実である。ギリシアの神々は何ら倫理の基準を示す存在ではなかったのだから。よって、かなりの数の非ヘブライ人がユダヤ教に改宗していたことも事実なのである。

このように、ユダヤ教は「異民族に布教する宗教」という点でもキリスト教の先輩であり、その「聖書」は権威があった。だからキリスト教は、その布教の初期にはユダヤ教の聖書を利用していたのである。

以上のことやその他様々な理由から、キリスト教自体が － 生前のイエスの考え方とは異なり － その当初からユダヤ教的なものを引きずっていた。「イエスは、ユダヤ人たちが待ち望んでいた（しかしユダヤ人だけでなく異教徒も救いたまう）メシア＝キリスト（救世主）なのだ」という公式ができあがったのだ。そのことを示すための文書として、ユダヤ教の聖書が「旧約聖書」（＝神との古い契約の文書）としてキリスト教にも使用されているのである。

1. 旧約聖書の構成

モーセ五書（律法＝トーラー）

- (1). 創世記、(2). 出エジプト記、(3). レビ記、(4). 民数記、(5). 申命記

歴史書

- (6). ヨシュア記、(7). 士師記、(8). ルツ記、(9). サムエル記上・下、(10). 列王記上・下
(11). 歴代誌上・下、(12). エズラ記、(13). ネヘミヤ記、(14). エステル記

教訓書（知恵書）

- (15). ヨブ記、(16). 詩篇、(17). 箴言、(18). コヘレトの言葉（伝道の書）、(19). 雅歌

預言書－大預言書

- (20). イザヤ書、(21). エレミヤ書、(23). 哀歌、(24). エゼキエル書、(25). ダニエル書
(26). 12の小預言書

ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書

ナホム書、ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

以上は、「プロテスタントのキリスト教の旧約聖書」の配列である。

当然といえば当然であるが、ユダヤ教の「聖書」はキリスト教の「聖書」と全くイコールではない。微妙に配列や文書の異同がある。

また、キリスト教のなかでも、東欧のキリスト教＝ギリシア正教会と、西方のローマ・カトリック教会、さらにルター・カルヴァンらの宗教改革の結果できたプロテスタントのキリスト教などによっても、「旧約聖書」の文書選択・配列に違いがある。

内容は、神話・伝説・ユダヤ人の歴史物語から、賛歌・預言の書に至るさまざまな形式の文書からなっている。その各文書の成立年代もまちまちである。ヘブライ語で書かれている。

2. 新約聖書の構成

福音書、使徒行伝、各種の書簡、黙示録からなる27文書を「新約聖書」とする。このことが確立したのは4世紀末、すなわち、キリスト教がローマ帝国の国教となったころのことである。

福音書……4種類のイエスの伝記。

- (1). マタイによる福音書、(2). マルコによる福音書
- (3). ルカによる福音書、(4). ヨハネによる福音書

いずれも使徒の名を著者としているがそれはウソ。

イエスの考えを継承した各グループの考え方の違いから、複数の福音書が書かれた。

最も古いのは「マルコによる福音書」である(60年前後)。イエスの実像を最もよく表していると思われる記録である。ただし、その最後のイエスの裁判・処刑に至る物語は、別系統の資料である。

これにQ (Quelle = ドイツ語で“資料”の頭文字) と呼ばれるイエスの語録資料を加味して、「マタイ」「ルカ」の2つは書かれた。(70~80年代)

「マルコ」の物語の筋書きだけいただいて、それぞれの立場から“修正”=書き換えたものである。「マルコ」「マタイ」「ルカ」の3つは「共観福音書」と呼ばれる。

唯一、だいぶ毛色の異なるのが「ヨハネ」である(90年頃)。神秘的で威厳のあるイエス像が書かれている。

使徒書

- (5). 使徒行伝……イエスの弟子たち(使徒)の言行録。

初めペテロ中心、のちパウロが回心して布教する話になっていく。最後は、パウロがローマに行って活動した、というところで終わっている。

「ルカによる福音書」と同じ著者によって書かれ、同福音書とセットで世に現れた文書である。

○書簡集

・パウロ書簡集

以下13文書のうち実際にパウロが書いたのは7つだけである(→真)。

パウロの書簡はいずれも西暦50年代に書かれたと思われる。

(よって新約聖書の中では最も古い文書ということになる。)

- (6). ローマ人への手紙(真)、(7). コリント人への第一の手紙(真)、(8). 同 第二の手紙(真)
- (9). ガラテヤ人への手紙(真)、(10). エベソ人への手紙、(11). ピリピ人への手紙(真)
- (12). コロサイ人への手紙、(13). テサロニケ人への第一の手紙(真)、(14). 同 第二の手紙
- (15). テモテへの第一の手紙、(16). 同 第二の手紙、(17). テトスへの手紙・(15~17=牧会書簡)
- (18). ピレモンへの手紙(真)

・無署名……(19). ヘブル人への手紙

・公同書簡……(20). ヤコブの手紙、(21). ペテロ第一の手紙、(22). 同 第二の手紙

(23). ヨハネ第一の手紙、(24). 同 第二の手紙、(25). 同 第三の手紙、(26). ユダの手紙

○黙示文学

- (27). ヨハネの黙示録……かなりわけのわからない文書

以上全て、ギリシア語で書かれている。「コイネーと呼ばれるギリシア語」などと歴史の教科書に書いてあるが、コイネーというのは“普通の”という意味でしかない。

パウロの書いた手紙に、「十字架で死んだイエスを信ずることによってのみ人は救われる」というキリスト教の教義が書かれている。その意味では、キリスト教の基礎を築いたのはパウロである、と言える。

私（山岸）がなぜ聖書に興味を持ったか

私は基本的に無宗教で、神は人間が発明したものであり、あらゆる宗教は迷信にすぎない、と考えている。しかし、宗教が説く様々な良い道徳まで否定するつもりはない。

また、宗教にともなって様々な芸術作品が残されたことを考えれば、文化史上も宗教の果たした役割は大きい。私の好きな西洋クラシック音楽も、その多くがキリスト教と切り離せない。

<学生時代>

聖書に興味を持ったキッカケも音楽であった。

学生時代に混声合唱団の演奏会で、モーツァルト、シューベルトなどのミサを歌った。その他数多く宗教曲をCDで聴きまくった。ミサ曲のラテン語の歌詞は共通のものであり、それにいろんな作曲家が曲をつけている。だから、作曲家のキャラクターの違いもよくわかる。

そしてその歌詞には、キリスト教の基本的な思想が盛り込まれている。ミサの第3楽章にあたる「クレド」というのは“信仰箇条”であり、その歌詞には「私は父なる神を信ずる」「私は神の子イエスを主と信ずる」「私は聖霊を信ずる」などとでてくる。これは**三位一体説**そのものだ。

それら宗教音楽の中でも圧倒的なのは、バッハの「マタイ受難曲」である。

この曲は「マタイによる福音書」第26～27章に曲をつけ、場面の合い間ごとに、その場面にあふさわしい宗教的な歌詞のアリアやコラール（賛美歌）を加えたものである。通して演奏すると3時間かかる。

聖書のこの部分は「イエスの受難物語」である。イエスが「自分は十字架にかけられる」と予言するところから始まり、**最後の晩餐**を経て、オリーブ山で逮捕され、ユダヤ教の大祭司のもとで、ついでローマ総督ピラトのもとで裁判にかけられる。十字架にかけられ、絶命すると同時に奇跡がおこる。その後、イエスは埋葬される、というところで曲は終わる。

バッハの曲は大変素晴らしいもので、この曲を聴くとキリスト教徒でなくても純粋な感動が得られる。（「この曲を聴いて泣けない人は、音楽に縁がない人である。」と水戸芸術館館長で音楽評論家の吉田秀和氏は書かれている。）

その曲の最後のほうで、イエスが十字架上で絶命した時に口にする最後の言葉はこうだ。

「マタイによる福音書」（第27章-46）

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」

これは「わが神、わが神、なぜ見捨てたまうのですか」という意味である。

「マルコによる福音書」（第15章-34）の記述もほぼ同じである。

「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」

これは「わが神、わが神、なぜ見捨てたまうのですか」という意味である。

これは大変な問題発言である。神の子であるはずのイエスが、神への疑念を口にして死んだ、と記録されているのだから。キリスト教の聖書の中に、キリスト教にとって都合の悪いことが書かれている。ということは、これが**真実の記録**であるということなのだ。

しかしキリスト教の立場からは、この部分は旧約聖書の「詩篇」第22の冒頭部分であり、イエスはそれを唱えようとしただけなのだ、などと苦しい弁明がなされている。

それに反論するためにはこの2つの違いに注目すればよい。イエスの最後の言葉は、「マルコ」がアラム語、「マタイ」がヘブライ語で記録されている。

イエスも含めて他のユダヤ人（ヘブライ人）にとって、本来の民族の言葉はヘブライ語であったし、ユダヤ教の聖書もヘブライ語で書かれている。しかし、イエスの当時は、ユダヤ人たちも日常生活ではヘブライ語ではなく、地中海東岸地域の国際商業語であるアラム語を使用していた。

だから、「マルコによる福音書」のほうがイエスの肉声としてはふさわしい。それと同時に、これが詩篇の冒頭を唱えたものだ、という説への何よりの反論になる。

では他の2つの福音書、「ルカ」「ヨハネ」では、イエスの最後の言葉はどうなっているか。

「ルカによる福音書」(第23章-46) ……「父よ、私の命をあなたの手ゆだねます。」
「ヨハネによる福音書」(第19章-30) ……「成し遂げられた。」

要するに、「ルカ」では、父なる神に対して優等生発言をして死んだことにされており、「ヨハネ」では、宗教者としての天命をまっとうした、と満足げに死んだことにされている。これを、「マルコ」(および「マタイ」と比べると、差は歴然としている。

「歴史は、このようにして、権威・権力のあるものにとって都合のよいようにねじ曲げられる」ということがよくわかるだろう。

逆に言えば、それを今見てきたようなやり方で、比較検討することによって、古代の人たちが、ねじ曲げようとし隠そうとしても隠しきれなかった真実、というものを見つけていくことができるのである。そして、それこそが「歴史学」の仕事なのだ。

「イエスは人間らしく死んだ人」であり、そうであるならば「イエスの考え行動したこと」と「キリスト教の教え」とは違うものであるはずだ。キリスト教は説教じみで嫌いだ、イエスはなかなかいい奴だったのではないか、ということは既に学生時代に薄々感じていた。しかし、聖書を全て比較検討して読む、なんていうヒマは学生時代には作れなかった。

<教員になって>

倫理を教えるようになって、イエスやブッダが実際に考えたことは何なのか、ということを知りたいと思い、キリスト教や仏教に対して批判的な目で研究した本を探していたら、次のような本を見つけた。いずれも高尾利数(法政大学社会学部教授、戦後まもなくできたばかりの茨城キリスト教大学で学び、同短期大学で教えていたこともある人らしい)が書いた本である。

「イエスとは誰か」(NHK ブックス 1996年刊)

「ブッダとは誰か」(柏書房 2000年刊)

この2冊は、高校生でも何とか読めるだろう。機会があったら読んでみて欲しい。

ところで「イエスとは誰か」には、「この本の内容は田川建三の研究に負うところが大きい」と高尾氏自身が書かれているので、今度は田川建三氏の本を買ってみた。これが凄かった。

「イエスという男」(作品社 2004年6月 第2版 [増補改訂版])

この本によってあぶり出されたイエス像は、まさにイエスはこういう人だったに違いない、と誰もが考えるだろうものである。何でこんなセリフをイエスは言ったんだろう?と疑問だったことが、この本を読めばほとんど全て解決する。また、このように行動によって社会に抗議する人だったからこそ十字架刑に処せられたのである。(おだやかに説教垂れるだけの男なら別に危険でも何でもない。十字架にける値打ちもなかろう。)

さてそうなる私はこの人の他の著書も全部読みたくなってしまふ。

「書物としての新約聖書」(勁草書房 1997年刊)

この本は700ページを越える大作。重さが1.5キロもある。新約聖書がどのように成立したか。現存する史料(パピルスなどに書かれた古い聖書の写本)にはどのようなものがあるのか。そうした史料によってギリシア語の本来の原文を確定する研究史。それを各国語に翻訳するときの問題点... など内容が盛りだくさんである。その中で、「本来のイエスの考えをキリスト教会がいかにねじ曲げているか」について、歯に衣を着せぬ批判を展開するあたりが「イエスという男」同様に痛快である。

田川建三氏の本によってあぶり出された真のイエス像の一端

彼の著書「イエスという男」の書き出しは感動的である。

イエスはキリスト教の先駆者ではない。歴史の先駆者である。……
先駆者はその時代を拒否する。……従って、歴史の先駆者は、その同時代の、
またそれに続く歴史によって、まず抹殺されようとする。……
しかしまた、抹殺されずに思い出が残った者もある。その先駆者としての性格が
非常に強烈であった場合には。……
けれどもこのように歴史が先駆者の思い出を抹殺しきれずに残してしまった場合には、
今度は逆にかかえこもうとする。キリスト教がイエスを教祖にしたのは、そういうこと
なのだ。……
キリスト教は、イエスの抹殺を継続するかかえこみであって、
決して、先駆者イエスの先駆性を後に成就した、というものではない。

イエスの意義をこれほど明快に述べた文章は、無反省なキリスト教徒の欧米人には決して書け
まい。以下、いくつか真のイエス像がわかるような記述を紹介したい。

1. 祈りとアーメン

イエスは、ユダヤ教の律法を批判していた。だから、ユダヤ教の律法主義者から、またイエス
の支持者たちからも、「ではあなたはどう祈るのか」と質問されることも多かっただろう。

弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも
祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときには、
こう言いなさい。

『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。
わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。…』 (ルカ 11 章 1-3)

聖書では、上のイエスお勧めの祈りの文句はもっと続くのだが、実際のイエスが口にしたのは
この2行だったろう。というのも、マタイ 23 章 5-7 では、イエスは「祈る時は金持ちのよう
にするな。彼らは目立つところで祈りたがる。そんなに祈りたければ、納戸か何かに引っ込んでそ
っと祈ればいいだろ。またくどくどと祈るな。だいたい奴らの祈りは長すぎるよ」というような
ことを言っているからである。

ところで、「御名があがめられますように」というのは、ユダヤ教の「カディシュの祈り」の
最初の部分である。でもって2行目がイエスらしいところだ。食べ物を下さいだと！

ちなみに「カディシュの祈り」とは次のようなものである。

大いなる御名があがめられ、聖められんことを。……
(神の) 御国が一刻も早く実現されんことを。アーメン。

さて、この最後の「アーメン」についてである。

「アーメン」とはヘブライ語で「まことにそうですね」「そうありますように」と宗教儀礼的
に賛同の意を表す言葉である。宗教家の祈りの文句に対して、一般信者たちが「アーメン」と唱
和するやり方は、キリスト教にも継承されている。

しかし、イエスは何とこの「アーメン」という言葉を、全然違うやり方で使ってしまった人ら
しい。自分の発言の直後に自分でアーメンと言ってしまう。それだけならまだしも、まず最初に
いきなりアーメンと言ってから決定的なセリフを吐くのである。

「アーメン。私ははっきりしておく。」

聖書を読んでいると、イエスのセリフで「まことにあなた方に言うておく」などと訳されてい
る所があるが、そこがどうやらこれらしいのである。

この件について田川氏はこう書いている。

巨大な宗教的権威を前にして、おとなしく、そつとあとから、声をそろえてアメンと賛同する、そういうものの言い方にイエスは耐えられなかったのだろう。彼には言いたいことがいくらかもあった。叫び出さねばならないことがいくらかもあった。当たり前だ。生きているというのはそういうことだ。この社会体制の中で収奪されて生きていけば、叫び出したくなるのも当たり前だ。……
そういう時に、どうして、権威に裏付けられた発言に対してのみそつと声をあわせてアメンと言っていないなければならないのだ。そうではないのだ。俺は言ってやる、
アメン、断固言ってやる。

もうこうなると、田川氏自身がイエスになりきって書いているとしか言いようがない。もの凄く迫力である。実は、田川氏の本は全編こんな感じなのである。

でもそれは決していい加減な記述ではない。第一級の聖書学者として、ギリシア語の原典や古い写本資料を研究した成果なのだ。

2. 貧しい人は幸い？

「マタイ」「ルカ」の福音書が伝えるところから、イエスが語ったであろう言葉を再現すると次のようになる。（「マタイ」5章3～いわゆる“山上の垂訓”）

幸い、貧しい者。神の国は彼らのものとなる。
幸い、飢えている者。彼らは満ち足りるようになる。
幸い、泣いている者。彼らは笑うようになる。

この「幸い」というのは、セム語系の言語独特の、動詞を省略する言い方である。だからこれは、「幸いである」とも「幸いになるだろう」とも「幸いになれ」とも解釈できる。

だが何にしても、宗教家として本当に「幸い」という言葉をかけて祝福してあげるべき人たちは、どの人たちなのか！ 神殿に財産を寄付できる金持ちどもに祝福を与えているユダヤ教指導部に対抗して、イエスは上のように宣言したのだ。

ところが、「マタイによる福音書」の著者は、「貧しいものは幸いだ」という文は現実にあわない、と考えて（その感覚は正しい）、次のように言葉を付け足した。

「霊において貧しい者は幸いである」（通常は「心の貧しい者は」と訳されている）

ここで「霊において貧しい」というのは、「神の前で謙虚である」という意味なのだ。これなら確かに神から祝福されるにふさわしい。「マタイ」の著者はそう考えた。

しかしこれは誤解も甚だしい。もしこんなことを言うイエスならば、ユダヤ教幹部から褒められこそすれ死刑になることなどなかったであろう。

3. 右の頬をなぐられたら

「ルカ」6章29には、こう書かれている。

あなたの頬を打つ者にはもう一方の頬も向けてやり、上着を奪い取る者には下着もやれ。

これをキリスト教徒は、「敵を愛せ」という言葉と結びつけて、寛容の精神などと理解している。でも、こんなアホな説教をするイエスが、貧乏人たちに魅力ある存在だろうか。

評論家・吉本隆明のことをとことん批判する田川氏も、吉本が若い頃に「これは底意地の悪い忍従の表情だ」と書いたことを高く評価している。

田川氏は書いている。

古代の下層民たちにとって、黙ってなぐられることはすぐれた道徳でも何でもない。その方が安全だというにすぎない。おとなしくもう一つ余計になぐられておいた方が、反抗してもっとひどい目にあったり殺されたりするよりはましなのである。

説教としてこんなことを言える者は、非日常的な倫理を語ったなどという誇らしさがある。しかし、嫌でもこういうことを言わざるを得ない者には、屈従せしめられた日常生活の憤りとうめきがある。

イエスは言った。「権力者どもがやってきて、殴りやがったら、もう一つのほっぺたも向けてやれ。しょうがねえんだよな。借金取りがやってきて、着ている上着まではぎ取りやがったら、ついでに下着までくれてやれ。欲しけりゃ持ってきやがれってんだ。」

説教者は言った。「君たち奴隷はですな。人に殴られても怒らずに、敵も愛して働かなければいけませんよ。上着が欲しいという人がいれば、下着もあげるようにしなさい。」

まさに、その通り。イエスは上のような言い方をしたに違いない。でなければ意味がない。

4. 神の愛、隣人愛---イエスは愛の説教者ではない

律法主義者から、「律法の中で最も重要な戒めはどれか」と問われたイエスが、次のように語ったとされている。

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして主なるあなたの神を愛せよ」

「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」これより大事な戒めは他にない。

(「マルコ」12:29-31、「マタイ」22:37-39 もほぼ同様)

しかしこの部分に関しては、「ルカ」の物語のほうがより真実だろう。

ある律法学者が現れ、イエスを試そうとして言った。「何をしたら永遠の生命が得られますか」。イエスは彼に言った。「律法には何と書いてあるか」。彼は答えて言った。

『心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして主なるあなたの神を愛せよ』。

また『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』とあります。」

イエスは彼に言った。「その通り行いなさい。」

イエスの教えは「愛」だとするキリスト教会が、わざわざこのセリフを、敵である律法主義者のものとして作り話するはずがない。だから、こちらのほうが真実だと判定できる。

しかし、「永遠の生命」などというのはどうでもよい。

この律法主義者は、律法を批判するイエスがどの程度律法を理解しているのか試しに来たのだろう。だから、やはり問は「一番大事な律法がなんだか知ってるのか?」というものだったろう。

田川氏はこう書いている。

どれが最重要の戒めか、という間にそのまま答えたのでは、個々の律法箇条についてはいくら批判してみても、ユダヤ教の法体系の基礎構造は承認して、その前提からものを考える、ということになってしまう。イエスが批判しようというのは、まさにこの基礎構造なのである。

イエスに「そんなことは、あなたの方が良く知っているじゃないですか」言われて、律法学者は、自分の先生から教わったこと(神の愛、隣人愛)を並べ立てる。

これに対してイエスは「いいじゃないですか。あなたみたいに良く知っている人が、何も私に質問することはありませんよ。わかっているなら、そのことを本気になってやってみてくれたらどうなんです? (貧乏人をいじめてないでさあ)」

そもそも、福音書に「愛」もしくは「愛する」という単語がでてくるのは、「いつくしむ」とか「好む」といった軽い意味で用いられる2・3の場合は別にすると、この箇所とあともう1つ、「敵を愛せ」というところの前後だけが、イエスの発言であって、あとは「マタイ」「ルカ」が原資料に対してあとから書き加えたものである、という。イエスは、「愛で社会問題が解決する」と考えるような甘ちゃんではなかったのである。

5. 隣人と敵

「隣人を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、よく知られている。
しかし私はあなたがたに言う「**敵を愛し**、自分を迫害する者のために祈れ」

(マタイ 5章 43-44)

～と言われていた、というのは「旧約聖書」の律法で、ということだ。しかし「旧約聖書」の中に、この「隣人を愛し、敵を憎め」という言葉がないのが聖書学者の悩みの種だったらしい。ところが、1947年に「死海文書」と呼ばれるものが発見され、その中にでてきたので学者たちは多いに喜んだという。

イエスが批判したのは「死海文書」の人たちであり「旧約」ではない、よってイエスの教えは「旧約」とも両立できる、というわけだ。

でも本当にそうだろうか。イエスがそんな一派のことをよく知っていたとはとても思えない。やはり、「旧約聖書」の「**隣人を愛せ**」という教えは、自動的に「**敵を憎め**」という考え方を**含む**はずである。田川氏はこう書いている。

この言葉（「敵を愛せ」）は、支配権力が「敵」を作り出すことによって、人民を自らの支配下にかかえこむことに対する逆説的反抗として言われてこそ意味を持つ。

ヒトラーが「汚れたユダヤ人」と言い、戦時中の日本が「鬼畜米英」と言い、21世紀初頭のブッシュ米大統領が「ならずもの国家」などと言って、敵を作る発想を自国民に強制した。そういうことをイエスは批判したのである。

6. 十字架

聖書によれば、イエスはユダヤ教幹部連中によって逮捕された後、まずそのユダヤ教の幹部によって裁かれ、次にローマ帝国がユダヤ人を支配させるために派遣した総督ピラトのもとで裁かれる。

ここで、「マルコ」「マタイ」「ルカ」「ヨハネ」の4つの福音書とも、微妙に差はあるものの、「総督ピラトは、イエスの処刑に気乗りがしなかったが、ユダヤ人たちが騒ぐので仕方なく彼らの好きなようにさせた」というように書かれている。

これは、これらの文書がすべて「ローマ帝国の支配下でキリスト教を守る立場から書かれた」ということからすれば当然である。ローマの総督によって裁かれた犯罪者を信ずる宗教、ということでは、ローマ帝国内でキリスト教が栄えることができないからである。

しかし事実は違う。

あらゆる権威・権力に疑念を表明し行動したイエスは、ローマ帝国にとっても邪魔な存在であった。よって、**ローマ帝国の処刑方法である「十字架刑」**に処せられたのである。

もし、総督が関与せず、**ユダヤ教幹部によってのみ処刑されたのなら、その方法は「石打ち」**、すなわち周囲から石を投げつけられて殺されたはずである。（「使徒行伝」の中でステファノがこのやり方で殺されている。）

聖書は、ローマ総督ピラトがイエスの処刑に積極的でないような記録のみを残した。

しかし、肝心の処刑方法がローマ帝国のやり方であったことだけは、隠せなかった。イエスが十字架刑という残虐な方法で殺されたことは、それだけ強烈な記憶だったのだ。